

かくかように伊那谷滞在中の日夏の文章には多数の地元人が登場するが、略称で書かれているせい、日夏没して半世紀ちかくなつたせいか、はたまた作品を読む人がいないせい、地域の人にさえ意外に知られていない。

偉い先生がおいでになつて執筆活動をしているというので、大風の離れ「水鶏の宿」の前を通っていた村の子どもたちは迂回するか、盗むように通つていく。一方、飯田の町場の大家のお坊ちゃんとして育ち、長じてからは東京で過ごしていた日夏は田舎の暮らしが珍しい。夜中の鼠退治は女中が蠅タタキで叩き殺し、要少年を呼んで片付けさせ、

山の雷鳴に肝をつぶし女中に吊らせた蚊帳の真ん中で妻と女中と一緒に丸くなる。「體具合がわるく臥たり起たり」の筈だが、友人から中村屋のカリントウとしほが

## 黄眠先生が行く

### 好物の御幣餅

5

嶋 不濁

まが届いたといつては「姑らくぶりで都の菓子とうまさ」などと食べすぎるものだから「胃が弱つたのか夏まげか、とかく気持がわるい」。ならばやめればいいのかを「夕飯は木家と呼ばれて好物御幣餅」(山荘日記)なのである。舌の根も乾かぬうち、飯田土産「月ヶ瀬」を啖べ、「飯田産白桃は岡山産にゆづらず旨し」なので

ある。もっともこの白桃、日夏の愛した母が川ドクトルに贈った樹に初めて成つ果実である、川ドクトルが届けてくれたものであるから一人だったのかもしれない。来客があるとビールを飲み、御幣餅・草餅を喰らう。菓子もたくさん届く。

梨ももらう。既に知命(50歳)の胃袋であるが、休むときがない。要さんから聞いた話では、当時の伊藤家の御幣餅はメガネ御幣ではなく、餅3つの団子御幣だった。それを日夏は3本から5本くらい食べたという。育良神社脇の「森のとうふ屋」が看板にする板に揮毫を頼みにきて、吉原揚げとボンボンを土産にくれる。

届けた看板は結局もつたないと店先ではなく、座敷の床の間に収まった。

わずか2ヶ月弱の避暑であつたが、たびたび飯田の町に出向き旧友と交流し、山荘では「南雪嶺山脈黒碧にくつきりと峙ちて美し」

天龍にかかる虹、軒端に乱れ飛ぶ螢、山羊の乳、食べられる野草、雨後の玉滴草葉に眼をとめ、「九二一といふ花火」に興じ、多くの客人が往来する中でコンニャクの葉を言い当てた俳山樵松下をさすがと評す日夏がそこにいた。

9月17日「午前舊僕兼太郎来りて荷物をまとめ終る」  
「荷物山の如し。森の豆腐屋さんも手伝ひ也。妻女中も

ついて下山飯田へ用事に赴く」が、本人はいたって呑気に、手伝ひもせず滞在中世話になった木下家に行き泊まるのだが、「予オナカを痛めたれば御幣餅を拵へぬ事とす」なのである。

翌18日朝は帰京のため、育良からハイヤアで飯田駅に向かう。途中同車した「通り町一丁目野翁」から、樋口家瓦解売立の折求めたという祖父輿平遺愛の端石研を譲ってもらう約束を交わした。「予大によろこぶ。桜町にて田氏龍峡一という店の銘酒大瓶を贈る」とあって、帰京の途についた。ちなみに「龍峡一」は大門口「板金」田口家の酒の銘柄である。



「森の豆ふ屋」の看板